

助成年度：平成 15 年度

[所属] 大阪市立自然史博物館

[役職] 学芸員

[氏名] 佐久間大輔 (他計 4 名)

[課題]

里山の生息地構造はどのように形成されたか？

里山環境の民俗学的・考古学的・生態学的理解を目指して

[内容]

京都府・大阪府・奈良県にまたがる京阪奈丘陵を対象に、里山利用の歴史の変遷、民俗の地理的変異と現在の植生との関連、里山が放棄される時代の民俗について、主に現況の植生調査と現地での聞き取り調査、さらに歴史・考古・民俗学的な研究成果をレビューすることで検討を行った。

価格競争力のあるクヌギの植林、草木の堆肥利用など江戸中期以降の流通経済の確立と輸送網の発達で里山利用も大きく影響された。これらは土質などにも影響されながら、経済環境にも左右され民俗・植生の違いを産んだ。里山の薪炭利用は果樹園や畑などの利用体系の中で位置づけられ、時に転換された。また、明治期以降の近代技術の普及に伴い利用や管理は大きく変化している。さらに戦後の放棄過程についても年代、需要のあった商品の有無、水路管理との関係などによって差異があった。従来の中での自家消費的イメージの強かった里山の資源利用は、このように実際には非常に経済的な活動であったと思われる。

現在、市民活動の舞台とされる里山であるが、かつて行われていた管理の実態を地域に学び、解明していくことが、今後さらに必要であろう。また、このような研究からは里山林の一回の伐採面積や過去の環境など、里山環境の生物保護のための指針を作る上でも有用な情報が得られるであろう。